『もりおかの短歌』

夏の部　優秀賞十首

改札(かいさつ)ではじける笑顔(えがお)

宮城県仙台市　郷家　美磨

風鈴(ふうりん)が「おかえりなさい」と

輪唱(りんしょう)している

啄木(たくぼく)の一握(いちあく)の砂手(すなて)に持(も)ちて

盛岡市　八重樫　敏夫

夏(なつ)の城跡(しろあと)

木陰(こかげ)で開(ひら)き

田舎家(いなかや)の庭(にわ)の

盛岡市　小林　貴史

紅玉色付(こうぎょくいろつ)きて

甘(あま)い芳香(ほうこう)淡(あわ)い思(おも)い出(で)

盛岡市　小林　貴史

誰(だれ)よりも急(いそ)いだ君(きみ)は
盛岡(もりおか)の
新幹線(しんかんせん)を見たがったろう

茨城県つくば市　渡邊　陽基

この街(まち)との別(わか)れ惜(お)しみつ
渡(わた)る橋(はし)

青森県青森市　鈴木　操

二度(にど)泣(な)き橋(ばし)とふ開運橋(かいうんばし)を

兵庫県神戸市　金井　靖子

秀麗(しゅうれい)な姿(すがた)と真逆(まぎゃく)な岩手山(いわてさん)
背中(せなか)に仏(ほとけ)
加護(かご)のあり

盛岡市　三澤　信裕

盆控(ぼんひか)え
亡(な)き夫偲ぶ母卒寿(つましのははそつじゅ)
丸(まる)い背中(せなか)で草刈励(くさかりはげ)む

鮎釣りの
講習なりや川原辺に
こどもの歓声楽しく響く

盛岡市　石川　修子

盛岡の街は耳から幸が来る
チャグチャグの音
中津川のせせらぎ

盛岡市　中島　久光

もりおかに妻の出産里帰り
赤子待ちわび
希望の夏空

長野県上田市　瀧澤　佳士

夏の部〈ジュニア部門〉

優秀賞一首

該当なし

【講評】

一般部門

今夏の日本列島は記録的な暑さに見舞われた。盛岡も例外ではない。しかし暑い暑いと言えば尚更暑い。そうであるのなら秀麗な岩手山を眺め、中津川のせせらぎを聴きながら夏をやり過ごすのも悪くない。そうこうしているうちに、ほら夏の暑さも、そして人生さえも、気がつけば新幹線のように瞬く間に過ぎ去ってしまいそう…。もしそうならいっそうのこと歌の中に、風鈴の音でしばしの涼が舞い降りる盛岡駅での再会や、盛岡城址の葉桜にかざした心の内を、一瞬の輝きを閉じ込めてしまおう。夏の詠み人の想いがそこにあるのだ。

平成三十年九月選　夏の部

投稿数　百二十四　首

選者　山本　玲子

『もりおかの短歌』夏の部

一般部門　優秀賞十首

こんなにも小(ちい)さき人(ひと)か
啄木(たくぼく)のマネキン抱(いだ)きて
Vサインする

埼玉県飯能市　小宅　初美

啄木(たくぼく)の一字一字(いちじいちじ)が
降(ふ)りしきる五月雨(さみだれ)のごと吾(われ)に
沁(し)み入る

東京都港区　高清水　純

我七歳(われななさい)
一人遊(ひとりあそ)びに口(くち)ずさむ
父(ちち)の愛(あい)せし啄木(たくぼく)の短歌(うた)

埼玉県飯能市　小宅　隆

命(いのち)よりはるかに長(なが)く
人々(ひとびと)の心(こころ)に生(い)きる
啄木(たくぼく)の短歌(うた)

秋田県湯沢市　佐井　良子

文庫本(ぶんこぼん)
リュックにしのばせめざすのは
岩手姫神啄木(いわてひめかみたくぼく)のまち

静岡県藤枝市　井戸端　光代

岩手山裾野(いわてやますその)に遊(あそ)ぶ馬(うま)たちの
晴(は)れの舞台(ぶたい)か
チャグチャグ馬(うま)コ

京都府長岡京市　吉田　正美

風薫(かぜかお)る好摩(こうま)の駅舎(えき)より仰(あお)ぎ見(み)る
啄木焦(たくぼくこ)がれし
姫神(ひめかみ)の峰(みね)

東京都港区　鈴木　有介

父母の青春の街（ちちはは　せいしゅん　まち）
盛岡で麺三昧す（もりおか　めんざんまい）
口福至極（こうふくしごく）

宮城県仙台市　木村　智佑

父の絵の完成を待ち（ちち　え　かんせい　ま）
北上の川見てをれば（きたかみ　かわ　み）
飛行機のとぶ（ひこうき）

東京都日野市　重信　祥太

岩大の北水の池（がんだい　ほくすい　いけ）
梅雨時はスイレンの花（つゆどき　はな）
ひときわ映える（は）

盛岡市　小林　貴史

夏の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

連日の猛暑に辟易した夏の日々でしたが、八月末締切りの「夏の部」の応募数はほぼ平年に並ぶ百二十首でした。中でも石川啄木にちなむ数首は、見るべきを視（み）、捉えるべきを捉えて詠われているところに惹かれました。

「こんなにも小さき人か啄木のマネキン抱きてVサインする」啄木記念館の等身大の像は意外なほど小柄です。きっと驚く人も多いことでしょう。

令和元年九月選　夏の部

投稿数　百二十　首

選者　松田　久惠

『もりおかの短歌』夏の部

一般部門　優秀賞十首

新婚(しんこん)の父母(ふぼ)暮らしたる与力小路(よりきこうじ)

亡母(はは)よ

あなたは十九(じゅうく)でしたね

宮城県仙台市　神田　和子

擬宝珠(ぎぼうしゅ)の橋(はし)からながめる

中津川(なかつがわ)

鮎釣(あゆつ)る人(ひと)にせせらぎの音(おと)

盛岡市　西川　政勝

盛岡(もりおか)の街(まち)に溢(あふ)るる

持(も)て成(な)しの心(こころつた)伝える

優(やさ)しき訛(なま)り

盛岡市　河野　康夫

群舞（ぐんぶ）するさんさの夏（なつ）が
恋（こい）しくて想（おも）ひを馳（は）せる
盛岡（もりおか）の街（まち）

盛岡市　河野　康夫

三周忌（さんしゅうき）むかえる旧友（とも）を
供養（くよう）する
共（とも）に歩（あ）るいた盛岡（もりおか）の街（まち）

盛岡市　赤坂　昌信

夕顔瀬（ゆうがおせ）を
そぞろ歩（ある）けば想（おも）い出（だ）す
友（とも）と唄（うた）った北上夜曲（きたかみやきょく）

盛岡市　小林　貴史

不来方（こずかた）の城（しろ）から
見（み）ゆる岩手山（いわてさん）
残雪線（ざんせつせん）が点（てん）になりゆく

盛岡市　鈴木　充

いつもなら
さんさの太鼓鳴り響く
盛岡の夏今年は静か

盛岡市　鈴木　充

啄木の短歌に魅かれて
文学に目覚めし賢治
岩手の絆

秋田県湯沢市　佐井　良子

寺の下
町屋が並ぶ鉈屋町
清き湧き水今も変わらず

千葉県佐倉市　坂下　明喜

夏の部〈ジュニア部門〉　優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

コロナ禍により、多くの催し物が中止となったりして、社会全体が閉塞感に被われている。その中にあっても多くの方から歌が寄せられたことを嬉しく思います。それぞれが、岩手や盛岡、そして啄木、賢治、また家族や友人に対する思いの深い歌を詠まれており、心が癒されてゆく感じになりました。ただ少し残念なのは、推敲しないままに歌を出してしまう方がおられることです。推敲によって歌の質が高まります。次回からはぜひ推敲をお願いします。

令和二年九月選　夏の部

投稿数　八十五　首

選者　山本　豊

『もりおかの短歌』夏の部

〈一般部門〉　優秀賞十首

愛猫（あいびょう）のいない夏（なつ）

つと銀（ぎん）ドロの深（ふか）き木影（こかげ）に

マスクをはずす

盛岡市　郷家　美磨

病（や）む夫（つま）に寄（よ）り添（そ）ふ吾（われ）も衰（おとろ）へて

古里岩手（ふるさといわて）

手繰（たぐ）りて生（い）くる

青森県青森市　鈴木　操

城跡（しろあと）に来（く）れば

脳裏（のうり）を駆（か）け巡（めぐ）る

盛岡城（もりおかじょう）の復元（ふくげん）ビジョン

盛岡市　小林　貴史

婆百合の咲く
長町と訪ね行く
啄木住みし新婚の家

東京都杉並区　髙﨑　美也子

せきれいが遊ぶ河畔の喫茶店
柳の木陰に
風鈴の音

盛岡市　西川　政勝

カジカ突きハヤ追いかけし
中津川
子達の声も今は懐かし

盛岡市　赤坂　昌信

擬宝珠下（ぎぼしした）
染物流し藍揺れて（そめものながしあいゆれて）
職人巧古都守りたり（しょくにんたくみこときまもりたり）

盛岡市　三澤　信裕

じゃんじゃんと煽る掛け声（じゃんじゃんとあおるかけごえ）
わんこそば喉をするりと（わんこそばのどをするりと）
胃袋満たす（いぶくろみたす）

盛岡市　河野　康夫

頂きは雲に隠れて岩手山（いただきはくもにかくれていわてさん）
旅人吾も（たびびとわれも）
マスク外せず（マスクはずせず）

神奈川県秦野市　加藤　三朗

涼風（すずかぜ）のわたる水面（みなも）に映（うつ）るのは
御所湖（ごしょこ）の空（そら）と
美（うつく）しき岩手山（いわてさん）

東京都板橋区　三宅　真紀子

『もりおかの短歌』夏の部

〈ジュニア部門〉　優秀賞三首

①
幸呼来（さっこら）と
想（おも）いを込（こ）めてひびかせた
届（とど）けてほしい八月（はちがつ）の風（かぜ）

盛岡市　荒井　心々愛

②
高松（たかまつ）の
白（しろ）いボートをゆらすのは
光（ひかり）をそそぐ新緑（しんりょく）の風（かぜ）

盛岡市　阿部　菜央

③
春（はる）の夜灯籠（よるとうろう）の中（なか）照らされて
震災（しんさい）のこと
こころにきざむ

盛岡市　松坂　勇飛

【講評】

〈一般部門〉

県外からの参加者も多く、盛岡で何を発見するか、楽しく選歌した。素材は独自の感覚で見つめるのが良い。そして、整っていることが大切である。気持ちを言い切るのではなく、余情を残すことが、短歌には求められる。

〈ジュニア部門〉

ジュニア部門の作品は素直に気持ちを表現していると感じた。短歌の見所の一つは素材である。何を詠っているのかによって、歌の評価が決まる場合もある。新鮮な目で素材と向き合い、その気持ちを語って欲しいと思う。

令和三年九月選　夏の部

投稿数　二百七　首

選者　赤澤　篤司

『もりおかの短歌』夏の部
〈一般部門〉　優秀賞十首

山々(やまやま)の青(あお)い匂(にお)いを胸(むね)に入(い)れ
啄木愛(たくぼくいと)しき
雨(あめ)の渋民(しぶたみ)

盛岡市　進藤美貴

城(しろ)あとの青(あお)きもみじに
かの歌(うた)よみと若(わか)き日(ひ)の
我(われ)かさねたり

奈良県橿原市　小西和美

さんさ踊(おど)り
熱夜(ねつや)の息(いき)は限(かぎ)りなし
娘(むすめ)と共(とも)に青春(せいしゅん)燃(も)やす

盛岡市　堀米公子

さくらんぼ
含(ふく)みて眺(なが)む岩手山(いわてさん)
若(わか)き想(おも)い出(で)に似(あじ)たる味わい

盛岡市　赤坂昌信

沿道(えんどう)に華(はな)やぐ音色(ねいろ)
待(ま)ち侘(わ)びたチャグチャグ馬コ(うま)
盛岡(もりおか)の初夏(しょか)

盛岡市　河野康夫

馬(うま)コいく
我娘嫁(わがことつ)ぐ日(ひ)の青空(あおぞら)よ
若(わか)き二人(ふたり)の笑顔(えがおまぶ)眩しい

盛岡市　川村佳子

この街(まち)は何(なに)か良(い)い事(ことあ)有りそうな
開運橋(かいうんばし)とふ
橋(はし)を渡(わた)りぬ

盛岡市　佐藤忠行

北上(きたかみ)のケケチ、ケケチン鳴(な)く河原(かわら)
麦わら帽子(むぎぼうし)は
鮎釣(あゆつ)る人(ひと)や

千葉県浦安市　岩田一

啄木(たくぼく)の新婚(しんこん)の家君(いえきみ)と吾(あ)の
靴(くつ)をぴたりと
寄(よ)せて揃(そろ)へき

奥州市　遠藤カオル

盛岡(もりおか)の
降(ふ)り注(そそ)ぐ陽(ひ)をなめていた
塩飴(しおあめ)を口(くち)に放(ほう)りこむ午後(ごご)

宮城県気仙沼市　及川舞

『もりおかの短歌』夏の部

〈ジュニア部門〉　優秀賞二首

（応募時、中学生以下に限る）

たのしみはさんさおどりの
笛の音（ふえ　ね）とたいこの音（おと）が
ひびく夕方（ゆうがた）

北上市　藤井彩花（十二歳）

海（うみ）の幸（さち）　山（やま）の幸（さち）
来（き）てみて感（かん）じた　人（ひと）の幸（さち）
また来（く）るよ　もりおかに

栃木県那須塩原市　佐々木花（十二歳）

【講評】
一般部門・ジュニア部門

盛岡はどうやら過去と交信ができるタイムマシーンかもしれない。自らの過去と対話をしたり、啄木が生きた時代や季節を感じたり…。なぜ盛岡は過去と現在の接点を持つのか?その理由を考えてみたい。さんさ踊りやチャグチャグ馬コの夏の風物詩がそうさせるのか。人々の脳裏に焼き付ける風景とは。ひとつ言えることは、盛岡の夏は短い。情熱的に一気に燃えてそして秋を迎える。それはまるで一瞬のきらめきを残して消える花火のよう。一瞬と永遠は表裏一体、その一瞬を、過去と現在を歌に託したくなる気持ちが私にはわかる。

令和四年九月選　夏の部

投稿数　九十二　首

選者　山本　玲子

『もりおかの短歌』夏の部
〈一般部門〉　優秀賞十首

もりおかの
夏(なつ)はさんさの幸呼来(さっこら)と
太鼓(たいこ)の音(おと)で幸(しあわ)せ願(ねが)う

盛岡市　赤坂昌信

騅雨(しゅうさ)去り　オーロパークに虹懸(にじかか)り
馬走(うまはし)り抜(ぬ)け

ヨシッ！　そのまま

千葉県浦安市　岩田一

願教寺(がんきょうじ)に
先祖(せんぞ)の墓(はか)に参(まい)る日(ひ)は
九条武子(くじょうたけこ)の歌碑読(かひよ)み嬉(うれ)し

盛岡市　小林貴史

殊更に轟き澄みて
太鼓の音
四年振りなるさんさ踊りは

盛岡市　佐藤忠行

この山とこの空を見た少年の
十五の心と
たどりゆく夏

大阪府枚方市　豊田佳子

盛岡の天満宮の社から
岩手山見る
山開きの日

盛岡市　西川政勝

中津川
団子石なるせせらぎに
赤褌の夏の幻

東京都江東区　藤村清彦

暑き日(あつ　ひ)に身(み)に染(し)み渡(わた)る
賢治(けんじ)の水(みず)ほのかに甘(あま)い
時(とき)の繋(つな)がり

フロリダ州ドラル　古澤春

親子馬(おやこうま)休(やす)み処(どころ)に授乳(じゅにゅう)する
人皆(ひとみな)ほほえむ
チャグチャグ馬コ(うま)

盛岡市　堀米公子

寝転(ねころ)べば
夏草(なつくさ)青(あお)き香(か)を放(はな)つ
今(いま)につながる啄木(たくぼく)の空(そら)

宮城県仙台市　松澤ふさ子

『もりおかの短歌』夏の部

〈ジュニア部門〉　優秀賞

（応募時、中学生以下に限る）

該当なし

【講評】
一般部門

猛暑ではありましたが好天に恵まれた今年の盛岡の夏でした。さまざまな行事も従来通りの賑わいを取り戻しました。また、遠くからもたくさんの旅行客が訪れ盛岡のよさを味わってくださったようです。寄せられた多くの作品から、まず、盛岡で詠んだ短歌、盛岡に関わる短歌であることがはっきりしている作品を選びました。次に作者の感動がいきいきと伝わってくること、新鮮な驚きと発見があること、今ここに生きているという視点から詠まれている作品に注目しました。次回もまた多数の応募をお待ちしております。

令和五年九月選　夏の部

投稿数　百七　首

選者　吉田　史子